上越教育大学研究紀要　第17巻　第1号　平成9年9月
Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol. 17, No. 1, Sept. 1997

P. ブルデューとマルクス理論

安　田　　尚*

(平成9年4月30日受理)

要　　旨

ピエール・ブルデューは，その学説的系譜上ウェーバー学派，デュルケム学派，マルクス学派など様々な位置づけをされている。本人に言わせれば，こうした評価は名誉でもあるが，同時にそれは彼の方法を理解しない一面的なものであるとしている。ブルデューの社会学は，様々な理論的系譜をそのポジティヴな契機に着目して「総合」したものと言わねばならない。

しかしそこには，マルクス理論の「太い一本の糸」を見出すことができる。J. ボードアンは，ブルデューの社会学をハバーマスとともに西欧マルクス主義における「迂回戦略」の一つと位置づけている。

ブルデュー自身は，マルクスの「実践」概念（『フォイエルバッハに関するテーゼ』）や歴史の「自然化」，「下向―上向法」から多くのことを学んだと指摘している。しかしそれだけではない。社会関係を「権力関係」として，また「階級関係」として捉えるブルデューの方法には，マルクス主義の影響を見ることができる。さらに，ブルデューの「象徴暴力論」や「社会空間論」（『ディスタンクシオン』），「ハビトゥス」概念には，マルクスの「イデオロギー論」や「階級論」，「社会決定論」の継承と展開の跡を見いだすことができる。

KEY WORDS
Pierre Bourdieu　ピエール・ブルデュー　marxiste　マルキスト　le marxisme occidental　西欧マルクス主義　le contournement délibéré　迂回戦略　la violence symbolique　象徴暴力　l'espace social　社会空間　habitus　ハビトゥス

1. は じ め に

奇妙なことにピエール・ブルデューは，本人の再三の否定にもかかわらずウェーバー主義者と呼ばれたりデュルケム学派と呼ばれたりマルキストと呼ばれたりしている。マルキストであるトニー・アンドレアーニに言わせれば，ブルデューは「マルキストというよりは，むしろもウェベリアン」(1)だと言う。また政治学者ジャン・ボードアンに言わせれば「フランス社会学の伝統を引き継いだデュルケム」学派であるとされる(2)。更に「現代フランス社会学の四極構造（A. トウレーヌ，R. ブードン，P. ブルデュー，M. クロツェール）」(3)の一極を成すレイモン・ブードンはブルデューをして「賢いマルキスト (sage marxiste)」と評している(4)。あるいは又，アメリカの社会学者ジェフエリー・アレギザンダーはブルデューを「隠されたマルクス主義 (marxisme caché)」と呼んでいる(5)。またかつてマルキストであった歴史家ル＝ロワ＝ラデ

*　社会系教育講座

リュはブルデューのことを「おめでたいマルクス主義者」と呼んでいるという[6]。そのうえまた，ブルデューは同時に「ウェベリアン」であるとともに「マルキスト」であるととされる始末なのである[7]。アレグザンダーやラデリュのようなイデオロギー的断罪は別として，こうした評価のなされる理由の一つは，卑小な研究者の多くがブルデューのような巨人を理解するにはそれを断片化するほかないからとも言えよう。つまり，社会学の創始者であるマルクス，ウェーバー，デュルケム達のうちの誰か一人にだけ自らの理論的系譜を負っている者は，ブルデューの理論的系譜を三人のうちの誰か一人に仮託させずには，落ち着きの悪さや不安を感じずにおれないからであろう。多くの場合，マルクスを知る者はウェーバーを知らず，またウェーバーを知る者はマルクスを知らず，等々といった事情のあることを考えてみれば直ちに了解できることであろう。ブルデューは巨大な総合をなしえた者の悲哀を語るかのように，筆者との会見で「人は読み手の犠牲になるものですよ（On est victime de lecteur）」と述べていた。[8]

さて，ブルデュー自身は自らの理論的系譜をどのように語っているのであろうか。彼自身は上述の誰か一人にだけその社会学を負っているものではなく，マルクス，ウェーバー，デュルケムを総合したものであり，正確に言えば文字通り「止揚」，つまり自らの社会学を構成するモメントとしてその他の諸理論（ライプニッツ，フッサール，ヴィトゲンシュタインなど）と共に組み込んでいるとしている。ブルデュー自身の言葉を聞いてみよう。加藤晴久はブルデューに次のような質問を投げかけている。「[あなたは] 反省的（自省的）社会学という言い方をしておられますね。しかしそれがある意味でブルデュー社会学を難解にしているのではないかとも思います」。これに対してブルデューは「これは何派だと分類できないのでまごつくのでしょう。奴はマルクス主義者だ，デュルケイム派だ，ウェーバー派だと三つのレッテルを同時に貼られたりします。[私は]同時にこの三人でもあれば，そのいずれでもない，これはむしろ名誉なことだと思っています。」，と答えている[9]。そして，「私のやったことは，対立点を見つけてあげつらう代わりに（これらの思想家の共通点ではなくて）彼らがお互いのうちに見て取らなかったすぐれた点を見つけて，より高次な段階での総合を行うことです。既得の成果を全体化する試みです」。しかもそれは，方法論を欠いた無手勝流の「折衷主義」ではない点を強調している。「しかし，もう一度断っておきますが，折衷主義とは違うのですよ。認識論の知識を活用して，厳密に構成し，整合性を持たせた理論にもとづいている仕事です。そして『社会学の社会学』によって，自分の理論を常にコントロールしているのです」[10]。しかし，これではまだ抽象的でわかりにくいと思われる。ここで言う「認識論の知識」とはカンギレームやバシュラールなどフランスの認識論的研究の成果であり，「社会学の社会学」とは知識社会学，つまり社会学的知を形成する社会的諸条件の対象化，自省的吟味の試みである（詳しくはブルデューの『社会学者のメティエ』（1973年）を参照されたい）[11]。かつてブルデューは『再生産』（1970年）のなかでこれら三者の理論が「権力の基礎」をめぐってどのように位置づけられるか，また総合しうるかを述べていた。少し長くなるが引用しておこう。「権力の基礎はどこにあるのかに関する古典理論，すなわちマルクス，デュルケム，ウェーバーの理論について見ると，その各人が自分の理論構成を可能にしている諸条件は，他の二者の対象構成の可能性と相容れないことがわかる。かくしてマルクスはデュルケムと対立することになる。デュルケムが社会的拘束一般の結果としか見なかった所に，マルクスは階級支配の所産を見たのである（デュルケムは，教育社会学という，合意の幻想がとりわけ強く支配している場で，自らの社会哲学をこのうえなく明瞭に露呈していた）。[←デュルケムが見落とした点をマルクスは見ていた事を指摘して

いる。] しかし，別の観点からみると，マルクスとデュルケムは，ウェーバーと対立している。ウェーバーは権力関係に個人間の影響や支配の関係を見ようとし，また権力の多様な形態（政治的，経済的，宗教的，等々の）を行為者の他者に及ぼす力（Macht）の社会学的には未分化な(indifférenciée)[曖昧一体となった]関係の在り方として示そうとしている。マルクスとデュルケムは方法論的客観主義のため，この点でウェーバーと対立している。[←マルクスとデュルケムが見落とした点をウェーバーは見ていた。]さらにデュルケムは，社会秩序を人間が作ったものとする見方に反撥したため拘束の外在性を強調することになったし，一方マルクスには，正統化されたイデオロギーの背後にあってそれを基礎づけている暴力の諸関係を暴露することに執着するあまり，支配的イデオロギーの効果を分析するとき，被支配者によって支配の正統性が承認される場合もあるという，力関係の象徴的な補強のリアルな効果を過小に見る傾向があった。したがってウェーバーは，デュルケムともマルクスとも対立する。ウェーバーのみが，正統性の表象が権力の行使と永続化にとりわけ貢献する事を明確に対象化していたのである。[←デュルケムとマルクスの見落とした点をウェーバーは見ていた。] とはいえウェーバーは，この正統性の表象の心理社会学的な見方に止まっていたために，マルクスがやったように，社会関係は力関係であるという客観的真理を誤認することが，社会関係において果たしている役割を問題にできなかったのである。[マルクスが見ていたものをウェーバーは見落としていた。]」(12)。筆者なりの解釈でまとめて見れば，ブルデューは『再生産』において，教育的関係が力関係によって，しかもその誤認によって支えられていること(マルクス)，また教育的権威は教育の方法と内容の「恣意性（ソシュール)」を「押しつける（デュルケム)」ことに貢献していること（権威による支配の正統化＝ウェーバー)，さらにまた教育機関の「外在的拘束性（デュルケム)」とその「相対的自立性（マルクス)」の論理を踏まえて社会の力関係の再生産に果たしている教育の役割を実証的に解明したのである。こうして見れば，ブルデューの方法が「単なる折衷」ではなく「総合」，つまりそれぞれの理論の持つ「合理的核心」の「止揚」であることが了解されよう。

しかしながら問題は，この「総合」を成立させているブルデュー自身の足場（スタンス）がどこにあるかである。すなわち，このようにブルデュー社会学の理論的系譜が巨大なる「総合」であるとしても，その問題設定，つまり社会関係を権力関係とし，また階級関係とする捉え方にはマルクス理論との強い親近性を見出しうると思われる。あれこれのレッテル貼りを拒否するブルデュー自身の弁明にもかかわらず，敢えて言えば筆者はそこに「一本の太い線」を見るのである。以下，本稿ではブルデュー社会学と西欧マルクス主義との関係，およびマルクス理論との関係について論ずることにしたい。

2. 西欧マルクス主義の潮流と P. ブルデュー

レンヌ大学政治学教授ジャン・ボードゥアンは，欧米のマルクス主義を三つの潮流に整理し，ブルデューの社会学を「マルク主義の迂回戦略（le contournement délibéré du référent marxien)」の一つと位置づけている(13)。筆者にはこれは，日本では全く見られない意外な捉え方であると思われる。更に言えばこの論文は，西欧マルクス主義の最新の動向を知るうえでなにほどか参考になるかも知れない。いささか回り道（「迂回戦略」）の感もあるが，しばらく彼

の主張に耳を傾けてみることにしたい。

ボードゥアンは，この論文の前振り（リード文）で全体を要約して次のように述べている。「マルキストの動向や如何？一部のマルキスト達は，『マルクス主義の総決算』に取り組んでいる。また他方では，[マルクス主義とは異なる]あらゆる知的試みに転換することで，慎重な迂回戦略が採られている。また歴史の皮肉とも言えることなのだが，今やマルクス主義に最も創造的で新しい展望を切り拓いているのは，英米の諸大学なのである」。つまり，彼はマルクス理論とのいわば「異種交配」をした英米アカデミズムのマルクス主義に新たな活力を見出しているのである。

さて彼は，ペリー・アンダーソンの『西欧マルクス主義』（1977年）を援用し，歴史上マルクス主義が成功をおさめた二つの政治的，物質的条件をあげている。その条件とは，①労働者を多数派に組織し，資本主義に対抗する選択肢（もう一つの途）を提供する有力な共産党の存在，さらに②マルクス主義的文化＝教養の開花を目指す多くの活動的な知識人の存在であった。西欧諸国でこの条件を満たしていたのは独・仏・伊の三国であった。すなわちドイツの一九二〇年代とイタリアとフランス（＝共産党と大物左翼知識人が長期にわたり政治的世界で中心的役割を果たす）がこれにあたる。しかし，一九一七年から一九二〇年にかけて，革命の試みが失敗すると「理論と実践の分裂」が生ずる。こうして，ヨーロッパ大陸におけるマルクス主義的な理論的生産は，革命の政治的指導者たち（レーニン，グラムシ，ローザ・ルクセンブルグ，トロツキー，など）から哲学者や社会科学者（アドルノ，マルクーゼ，アルチュセール，プーランツアス）へその場をを移したのである。しかしこのようなマルクス主義の世俗化，つまりアカデミズムへの浸透と拡大は一九七〇年代からはじまるのだが，いわゆる「東欧革命」「ソビエト体制の崩壊」によっていっそう加速されたこれらの国の共産党の凋落の影響を受けることになる。その結果，①マルクス主義は，革命的展望の喪失によって予言的機能を失い，②マルクス主義的文化の運動と普及の拠点（サークル，研究所，雑誌等）は財政難に見舞われることになる。また③これらの国々の共産党の危機は，旧来のマルクス主義的教義体系の再検討を迫ることになったのである。ボードゥアンは以上のように，マルクス主義の動向を左右した政治と知識人の関係を概括したうえで，最新の西欧マルクス主義の潮流を三つに整理する。

すなわち，マルクス主義的思想潮流をはこうした激しい流れの中で分裂し，ヨーロッパ大陸では，マルクスの著作の再解釈によって「マルクス主義の総決算」を試みる潮流が生まれた。この第一の潮流は，「マルクス主義の総決算（le marxime d'inventaire）」路線と呼ばれるものである。フランスにおけるこの路線は，『アクチュエル・マルクス（Actuel Marx）』誌（J. Bidet, J. Texier によって1987年創刊，協力者：G. Labica, E. Balibar, Y. Quiniou, L. Sêve などの仏共産党の党員ないし元党員。しかし，政党からは自由，独立した思想的立場をとる。）を拠点に展開されている(14)。この路線は以下の三つの特徴をもっている。まず第一に彼らは，マルクス主義の初志を保持しようとしている。すなわちマルクス主義は，社会の本質と社会の進化（l'évolution）を解明し，社会の変動を促進する道具を提示するものとされる。現代（moderne）社会の機能のリアルで冷静な分析を目指し，資本主義に対抗する魅力的なオルタナティヴ＝もう一つの途（alternative）を提示しようとする。さらに第二に，マルクス主義の予言能力の問題に関して言えば，「資本主義は自らの墓穴を掘る」とする見方を保持している。すなわちマルクス主義は資本主義の内的矛盾を解明し克服できるのであり，その生産の拡大を確保し，人々に幸福をもたらすことが出来ると主張する。しかしながら第三に，この路線はマルクス主義の

「学問的自惚れ（prêtention scientifique）」を戒めている。すなわち，マルクス主義を世界解釈の完璧な閉じられた体系とする見方は放棄しているのである。例えば，フランスのマルクス主義経済学者，過渡期論の専門家であるC.ベテルハイム（Bettelheim）は，「歴史にはその目的は書き込まれていない」と述べている。つまり，歴史の重要な部分は未決定であり，現存社会の改良がもたらされる歴史的チャンスは，「可能性」であって「必然性」ではない，というのである。さらにイタリアの哲学者ルーチョ・コレッティ（Lucio Colleti）は，「マルクスの教義は，もはやイデオロギーの天空に輝く唯一の［導きの］星ではない」と主張している。

さらにマルクス主義の第二の潮流は，「迂回戦略」と呼ばれるものであり，①ジョン・ロールズの影響を受けているイタリアのサルバトール・ヴェカ（Salvatore Veca），②ハバーマスのコミュニケーション行為論，そして③ピエール・ブルデューの社会学があげられる。これらの潮流は「マルクス主義的教説とは異なった社会学の分野で展開されているが，マルクスの社会観と相同的な（homologie）見解を示している」。

第一の「迂回戦略」であるロールズ的試みを代表するヴェカは，イタリアにおける著名なロールズ研究者である。彼の著書（*Il programmo scientifico Marx,* 1987）は，リベラルな現代社会のアポリアを解明できないと言う理由からマルクスの教義を拒否している。ロールズの『正義論』をマルクス主義の欠落部分を埋めるものとし，また人間社会の将来を考察したものとして評価している。この点でマルクス主義との絆を断ちきったマルクス主義的知識人にとって有効な理論であり，新たな地平を拓くものとヴェカは見ている。ロールズの思想は，世俗化されたユートピアとしての，また個人主義を認めない分析装置としてのマルクス主義を放棄している。しかしロールズの理論は，社会的正義の原理を提起することで，民主主義の正当化と自由主義経済の活力及び政治的自由を確立させるものである，と高く評価されている。要するにそれは，従来のマルクス主義とは相容れないとされてきた個人主義と自由主義に依拠して，マルクス主義の倫理的側面を補強しようとする試みである。

さらに第二の「迂回戦略」は，ハバーマスによるマルクス主義の再構築である。ハバーマスの続行中の研究は，正統的マルクス主義からの「脱出（sortie）」の試みを示している。彼は，フランクフルト学派がマルクス理論から受容し，展開したものから距離を置こうとしている。その著『マルクス以後（Après Marx）』では，正統的マルクス主義からの解放の，さらにドイツの多様な知的伝統との再結合の意図が表明されている。とは言えハバーマスは，社会を解明し，その矛盾を分析する点でマルクス主義に依拠しているが，その実践的方法や予言は受容していない。ところでこのマルクス主義の世俗化［いわゆる「正統的マルクス主義」からの離脱］は，（マルクス主義の精神を保持しているものの），権力の支配を批判しうるのだろうか，また革命的ユートピアに陥ることなく解放の理論を構築しうるのだろうか？ハバーマスの場合，支配の古典的パラダイムとより広範なコミュニケーションのパラダイムの結合によって，それは可能だとされる。ハバーマスによる弁証法的唯物論の再建は実り多いものである（その成果：『コミュニケーション行為論』）。伝統，習慣，価値がその規制力を喪失し，「生きられた世界の植民地化」を包囲する「管理社会」と「市場社会」の論理が展開されるに至った今や，「相互理解の空間」の保持と拡大こそが，ハバーマスにとって幻滅に対する防波堤となる。緊急の課題は，社会生活（とくに家族）を市場経済と規制的管理の統合的論理に有効に抵抗する橋頭堡として保持することにある。こうしてハバーマスは，野放図な自由主義を抑制し，民主主義の復権をはかろうとする。ハバーマスの民主主義論は，自由を尊重する「権利の国家」の確立と「公

的空間」(＝コミュニケーション的論理に基づいた公的決定に対する市民参加)の再建を目指すものである。

さて第三の「迂回戦略」は［我が］ピエール・ブルデューの批判的社会学である。ブルデュー自身は，常にマルクス思想への忠誠やそのエピゴーネンたることを拒否している。ブルデューが直接的には，マルクスの思想系譜に属さないことは明らかである。ブルデューの研究歴を見れば，それはマルクス思想から外れた系譜，つまり社会学及び社会人類学であることは明らかである。ブルデュー自身は，フランスの社会学的伝統（デュルケム）に属すると主張している。しかし彼は，政治的問題や解放の教義への投企（engagement）が社会学的研究を危うくするものだという考えを退けている。それは，ブルデューの「象徴的支配の社会学」が，西欧マルクス主義の凋落から全く影響を受けていないことを示している［多くのマルクス主義者が西欧マルクス主義の凋落によって自信喪失に見舞われ，実践から身を引いていることを考えればわかるように］。つまり革命的予言主義の崩壊の後でも，ブルデューによって再建され，豊かにされた社会学的伝統が生き延びているとすれば，マルクス主義的土壌とは全く無縁な土壌でこの伝統が発展したことになるからである。ブルデューの周辺には，一九六〇～七〇年代の革命的試みに参加した世代がいる。さらにこれに属さない若い世代は，「退屈なまでの厳格性（rigueur ennyeuse）」に惹かれてブルデュー学派に参加している。このようにブルデュー社会学とマルクス主義の間には直接的関係を見いだせないにしても，両者の学問体系には親近性があると言わねばならない。ブルデュー社会学とマルクス思想の間にある「共犯関係（complicité＝暗黙の了解）」の第一の要素は，両者が支配のパラダイムによって社会秩序を考察する点にある。それは，社会生活の本質的な骨組みを形成する階級対立を明らかにしない限り，社会空間は解明できないとするものである。もちろん，ブルデューはマルクス主義的な「還元主義」には与しないが，綿密なソフィストケイトされた仕方で，社会的支配の現代的メカニズムの解明に取り組んでいる。ブルデューは，それを一種のコペルニクス的転換によって成し遂げている。つまり視点を生産の場から再生産のメカニズムに移行することで支配の理論を構築しようとしているのである。こうして新しい概念であるハビトゥスが定式化される。「内面化された性向のシステム」，「認識と態度の構造化されたマトリックス」であるハビトゥスは，各人に固有な慣性の力によって，社会空間の内部の各行為者の選択，嗜好，行動を方向付ける。「国家のイデオロギー装置（アルチュセール）」＝つまり外的強制ではなく，「象徴暴力」がハビトゥスという文化的起動装置によって「自然に」再生産され，行使される。

ブルデュー社会学とマルクス主義との第二の相同性は，近代民主主義［の限界］に対する批判にある。これはブルデューの教育論において展開されている論点である。従来，学校は普通選挙とともに民主主義の解放的願望を示すものとして称揚されてきた。しかし，ブルデューの教育社会学の中心問題は，このジュール・フェリー以来の共和主義的イメージが育ててきた「メリトクラシー神話」の一掃にある。革命的選択肢が失権した今日，ブルデュー社会学は近代民主主義批判のチャンピオンなのである。この点でネオ・マルクス主義の正統派を超えている。

ブルデューは，社会関係の「記述」だけを科学の使命とはしていない。「行為主体を規定し，人々の不幸を生み出している社会関係のメカニズムを行為主体が，多少とも支配（maîtriser）出来るようになるなら，社会関係はその悪い面をかなり減らすことが出来るであろう」，と述べている。こうして，ブルデューの場合，社会学は不遇な社会的行為者に彼らを支配するメカニズムを教え，またそうすることで彼らが自分の運命を手にすることを助ける点で，役立つものと

される。つまり，こうした意味での科学の倫理性を主張する点でも両者には共通点があるのだ。

そして最後の第三の潮流は，マルクス主義の陳腐化＝老朽化（l'obsolescence）を確認し，全く新しい知的地平を探求している。伝統的にマルクス主義に抵抗してきた英米諸国で，マルクス主義の革新が起こったのは歴史の皮肉と言えよう。従来，英米の諸大学（オックスフォード，ケンブリッジ，ハーバード，スタンフォード）では，マルクス主義は定着も発展もしなかった。イギリスの一九八〇年代までは，マルクス思想はごくマイナーな存在でしかなかった。アカデミズムの世界では「限られた領域」に止まっていて，わずかに現代史の領域でM. ドップ，E. ホブスボーム，T. クリフの仕事が光輝を放っていたにすぎない。イギリスのマルクス主義は僅かに大陸の知識人にとって魅力あるものであったし，この勤勉で孤独なマルクス主義はヨーロッパ大陸のマルクス主義の将来に期待し，これが生き延びるための前提条件だとされてきた。しかし，一九八〇年代に転換が起こる。イギリス・マルクス主義は，分析哲学と融合し，完全に「文化変容した（acculturé）」マルクス主義，つまり「分析的」，「個人主義的」，「倫理的」マルクス主義となったのである。

まず「分析的マルクス主義」をとりあげて見ると，その代表者G. A. コーエン（Cohen）はその著『カール・マルクスの歴史理論（一九八七年）』（*Karl Marx's Theory of History*）の序文で，「本書は二つのもに依拠している。その一つはマルクスのテキストであり，もう一つは20世紀の明晰で厳密な分析哲学である」と述べている。この手法が新しい学派を形成し，新しい発展的展望を切り開いたのである。Jon Elster, Adam Przeworski, John Roemer, P. Van Parijis, E. O. Wright らが西欧マルクス主義の創造的，活動的な分枝を形成している。マルクスの知的伝統に，あらゆる科学的とされる方法と基準が適応され，マルクス主義はもはや「世界の全体的概念」とは見なされなくなり，「理論的」「分離可能」「分析的」「反証可能」なものとなる。マルクスのテクストは，命題群に慎重に分解＝解体され（décomposée），経験的に検証されるにはあまりにも一般的にすぎるものと，明晰で，厳密で「論証可能な原理（principe de vérification）」に曝されうるものに振り分けられる。この「分析的」手法は，とりわけマルクス主義の社会発展論と対決し，またマルクスの経済理論に適応される。J. Roemer や P. Brenner は，マルクスの政治経済学の中心カテゴリーである価値，搾取，余剰価値を疑問に付すことを躊躇しない。しかし，E. O. Wright は，現代の社会変動を照らし出すものとして社会的「階級」概念を評価している。明示的に述べられていないが，これはカール・ポパー『開かれた社会とその敵』で行った手法の適応と言ってよいであろう。

第二の「個人主義的マルクス主義」は，分析的マルクス主義と方法論的個人主義および合理的選択理論の結合である。マルクス主義は歴史に強い理論であるが，この歴史を作る個人に関しては関心が薄いと言える。この分析的マルクス主義は，方法論的個人主義，特に合理的選択理論のパラダイムに依拠しようとする。つまり，ゲーム理論は「直線的因果論」を修正し，個人的意志の自由な役割を認める。この分析的マルクス主義と結合した方法論的個人主義は，階級の行為と階級対立の理論を再構成する。例えば，A. Przeworski は，人々は奴隷状態にあっても完全には「圧倒されて」はいないのであり，奴隷は様々な戦略を駆使できると主張する。すなわち，奴隷は「対決戦略（スパルタクス）」，「改良戦略（生活条件の改善要求）」，「逃亡戦略（l'exit d'Hirschmann）」，「個人主義的戦略（奴隷主になる）」などを選択し，駆使しうると主張する。通俗的マルクス主義が蜂起と反乱だけを選択肢とするところに，個人主義的マルクス主義は多様な選択を数え上げるのである。ここから容易に推測できるように，このマルクス

主義は「合理的選択理論」を現代資本主義の変容に適応し，プロレタリア革命の必然性のテーゼの再検討を迫っていると言えよう。つまり，英米のマルクス主義は，発達した資本主義国ではなぜ革命が起こらないのかを説明したことになるのである。

第三の「倫理的マルクス主義」は，ヘーゲルによる「事実」と「価値」の領域の混同の放棄とマルクスによる階級闘争への道徳的概念の融合に疑義を呈する。マルクス主義に倫理的基礎を置くのではなく，科学的分析と倫理的評価の分離を主張するのである。すなわち J. Roemer は，マルクスの社会理論とロールズの道徳哲学の和解を試みようする。

こうしてマルクス主義の新たな展開は，ヨーロッパ大陸から英米圏へ移行している。さらに経済分野では，バラン・スウイジー，ウォーラースティンなどが国際関係論を，又オコンナーが公共政策を展開している。以上ボードアンは，マルクス主義の新たな展開を英米のアカデミズムに見るとともに，ブルデュー社会学をマルクス主義の「迂回戦略」の一翼を担うものと評価しているのである。(彼が旺盛な創造力を発揮していると評価する「分析的マルクス主義」が，マルクス主義ないしマルクス理論の「解体作業」に通ずるものなのか，あるいはまた「近代理論」—自由主義と個人主義に基盤をおいた論理的厳格性，経験的実証可能な基準—に適合されたその再建や復権に至るのかは定かでない，と筆者には思われる。)

3. ブルデューとマルクス理論

さてブルデュー自身は，マルクス理論との関係をどのように述べていたのであろうか。この点を確認しておこう。彼は自らの知的遍歴を語るなかで，エコル・ノルマル時代にマルクスを集中的に読んだと述べている。すなわち「マルクシストだとかアンチ・マルクシストだとかいったこととは無関係の次元で，マルクスも読みました。だから共産党にいた連中よりはマルクス主義者であったと思います」[15]。あるいはまた「とりわけ私は，思弁から抜け出たいと思っていた」と回顧しているその時期に，方法論に関する「マルクスの全著作を—マルクス以外のものもたくさん—読み返しました（おそらく，その頃が私がマルクスを最も読んだ時期です。)」[16]，と述べている。そしてハビトゥス概念を構築する上で，「例の『フォイエルバッハに関するテーゼ』には大いに助けられましたが，あれは考える上での助けというよりは，私自身の考察をさらに前進させる上で助けとなったのです」[17]としている。つまり，「唯物論的伝統は，とりわけ『反映』理論のせいで，実践的認識の『能動的側面』というものを観念論の手に委ねてしまったわけですが，これを観念論から取り戻すことが課題でした。実践的状態において，知覚と評価のカテゴリーとして，あるいは行為の組織原理であると同時にランク付けの原理として機能する，[後天的に]獲得された図式の体系，こうしたものとしてハビトゥス概念を構築することは，社会的行為者を，対象の構築の実践的実行者という，その真のあり方において構成することに他なりません」。要するにブルデュー社会学の独自性を示すハビトゥス概念の形成において，このマルクスの『フォイエルバッハに関するテーゼ』は重要な役割を果たしたというのである。

さらに，「社会的世界」における「場 (champ)」の「相対自立性」に関しても間接的ながら，マルクス理論の影響を受けていると述べている。すなわち「また芸術の場に関して当時研究を始めていましたが，それとの関連で，相対的自立性というマルクス主義的概念についても，考

究しました（両大戦間時代に，マックスという名の亡命ドイツ人によってフランス語で書かれた『マルクス，プルードン，ピカソ』という本は，私にとって非常に役に立ちました」[18]。ちなみに言えばブルデューの指摘する本書は，マルクスの『余剰価値学説史』の文言を引きながら，「物質的生産」と「精神的生産」の関係を考察している。つまりマルクスは「精神的生産と物質的生産の関連を考察するためには，なによりもまず，後者自体を，一般的な範疇としてではなく，一定の歴史的形態においてとらえることが必要である。……。物質的生産自体をその独自な歴史的な形態においてとらえなければ，それに対応する精神的生産についての規定的なものを，および両者の相互作用を理解することはできない」，としていた[19]。ここからマックス・ラファエルは，三つの問題を引き出している。一つは「経済的構造から芸術のイデオロギーへ移行する媒介」の問題，第二に「経済的発展と芸術の発展の間には比例関係がないこと」，そして第三に「［芸術作品の］『永遠の魅力』と個別の芸術における規範的性格」の問題である。つまりは芸術の領域の「相対的自立性」を主張していたのである[20]。

さらに，ブルデュー社会学の方法論を体系的に解説し，後学者のための手引きとして書かれた『社会学者のメティエ』では，次の二つの文献がマルクスから採られている。すなわち，『哲学の貧困』と『経済学批判要綱』である。前者からブルデューは，「国民経済学者」が「『歴史』を消し去ることによって，……ブルジョワ諸制度とブルジョワ的生産諸関係の『自然的』性格を主張することにより，ブルジョワ的社会秩序に正統性を与えるとともに，支配が歴史的，したがって一時的性格のものであるという考えから支配階級を守っているのである」，という結論を引き出している。さらに後者からは，「科学的抽象化の作業」，いわゆる「下向―上向法」の意義を強調し，「研究がその歩みの終局になって再構成する『概念的に把握された具体』」をつかまねばならないとしている[21]。要するに，ブルデュー社会学の形成において，また科学的方法論において，マルスの知的遺産が重要な役割を果たしていたことは明らかと思われる。

さて，最後に，今少し論点をしぼって，ブルデュー社会学とマルクス理論との関係を見てみよう。その一つはマルクスのイデオロギー論とブルデューの「象徴暴力（la violence symbolique）」論との関係である。周知のように，マルクスのイデオロギー論は，道徳，宗教，哲学，法律や政治理念，経済理論など（「精神的生産物」）の知の体系が，特定の階級的利害によって形成され，それを正当化する機能を持つものとしていた。言うまでもなく，マルクスが注目していたのは「支配階級のイデオロギー」が資本主義的生産関係の「隠蔽」と「正当化」に果たす役割である。ブルデューもまた「ある特定の社会組織において，これを構成している集団間または階級間の力関係のゆえに文化的恣意［イデオロギー］の体系のなかで支配的地位に置かれている文化的恣意は，つねに間接的であるにせよ，支配的集団または支配階級の（物質的な，象徴的な，）客観的利害をこのうえなく完璧に表現している」[22]，としていたのである。このブルデューの文言は，『再生産』において教育の「場」に固有な象徴暴力の行使のメカニズムを分析しているものであるが，「文化的恣意」をイデオロギー一般とすれば，マルクスのイデオロギー論を踏襲したものといえよう。さらにブルデューは歩を進め，こうした「文化的恣意」の「押しつけ」効果が押しつけられる側，つまり「被支配的集団あるいは被支配的階級」に怪しまれることもなく「自然」なもの「当然」なものとして，受容される論理を探求している。この点はマルクスのイデオロギー論を発展させたものと言える。それは「教育機関」がまとう「権威（autorité）」（ウェーバー）の存在である。すなわち，「教育的働きかけ」は教える者と教えられる者との間の「コミュニケーション関係」を通じて行使される「象徴暴力」であり，「このコ

ミュニケーションがその固有の効果……を発揮しうるのは，教え込まれる内容の恣意性があからさまな事実としては決して露(あらわ)にならない限りにおいてである」。そしてこの「恣意性」が露にならない社会的条件が「教育的権威」と教育的機関の「相対的自立性」なのである[23]。わかりやすく言えば，「教育的権威」の存在によって学校は決して嘘を教えないものと生徒や親に受け取られるであろうし，また学校の「相対自立性」によって学校はある特定の支配階級や支配的集団に従属していないとされ，教師は，「教育の自主性」に基づいて安んじて「教育労働」に携わることが出来るのである。こうして「文化的恣意」の「誤認 (méconnaissance)」によって「教育的権威」は，「正統化 (lêgitimité)」され，「象徴暴力」は行使されるのである[24]。教育の「場」における「象徴暴力」は，意味と価値を担った言葉による「教育的コミュニケーション」を媒介にして，「文化的恣意」を「押しつける」ことで「階級間の力関係の構造の再生産」[25]に寄与するとされる。こう見てくれば，ブルデューはマルクスの見ていなかったもの，すなわち「社会的世界」の固有の「場」における，イデオロギー的支配を受容する主体の側の論理を「象徴暴力」論によって展開していたと言えよう。

第二にマルクスの階級論とブルデューの階級論との関係を見てみよう。ブルデューは『ディスタンクシオン (一九七九年)』で明らかにしたように，マルクスが生産関係によって規定されたとする「階級」に，「差異の体系 (système de différences)」[26]としての「階級」を見る。彼は階級を「支配階級」「中間階級」「庶民階級」の三つに分け，これらの階級を経済資本と文化資本が交叉する基軸のなか（「社会的空間」）に位置づけている。そしてこの「社会空間」に一定の「地位 (position)」を占める各階級と「趣味」「消費行動」「倫理的態度」などとの間の照応関係を実証的に明らかにしている。しかも重要なのは，単に階級と生活様式等の照応関係を明らかにしたのではなく，「社会的空間」が「卓越化 (distinction)」をめぐる「闘争」，つまりこの意味での「分類闘争＝階級闘争」の「場」であることを示した点である。社会は一定の経済的資本と文化的資本を備えた諸階級が，そこから得られる物質的・象徴的利益を維持する，あるいは奪い合う「闘争の場」なのである。社会を広い意味での「階級利害」をめぐる闘争の場とする点でブルデューの階級論は，マルクスと共通している。また両者はその方法論においても共通性が見られる。つまり，階級を関係概念において捉えている点である。この点，前述のフランスにおける「マルクス主義の総決算路線」を代表する雑誌『Actuel Marx』誌における特集号「ピエール・ブルデューをめぐって(一九九六年)」で，イヴォン・キニウ(Yvon Quiniou)は次のように指摘する。ブルデューは，「実体論的，原子論的概念ではなく，『関係論的思考様式 (un mode de la pensée relationnelle)』，つまり関係のシステムとして」階級を捉えようとしているのだ。「これは，まさにマルクスの階級論に見られる視点に他にならない。つまり一つの階級は一つの独立した実在 (réalité) として，直接的に捉えられてはならない。階級は他の階級との関係やその限界との関係においてのみ存在するのだ。プロレタリアを欠いたブルジョアもいないし，ブルジョアを欠いたプロレタリアも存在しないのだ」[27]。確かにマルクスは，資本を人と人の関係として捉えると同時に，階級も関係として捉えていた。ブルデューも同様に階級を「社会構造における地位関係として捉えうる」としていたのである[28]。しかしキニウは，マルクスとブルデューの階級論の間には，看過しがたい違いもあると指摘する。つまり，「マルクスは共産主義における階級の消滅を主張していた。ブルデューの場合この点が違っている」。ブルデューは，「差異」を「歴史的に偏在する必然性を帯びた一つの普遍性」としている。確かに，ブルデューは『実践理性』(一九九四年) のなかで「『階級なき社会』の神話，す

なわち差異なき社会」の神話を批判していた[29]。キニウに言わせれば，これは「差異」概念と「階級」概念を同一視するものに他ならない。つまり，問題は「階級」概念を「差異」概念に包摂しうるか否かなのだが，キニウは「両者は区別すべきもの」[30]だと主張する。筆者なりに概念を整理すれば，「差異」概念＝抽象的，歴史貫通的，必然的，普遍的概念＞「階級」概念＝具体的，特殊歴史的，偶然的，特殊的概念，という対立図式が浮かび上がってくる。キニウに言わせれば，ブルデューのように「差異」＝「階級」としたのでは「階級の消滅」は起こりえないのであり，希望なきペシミズムやニヒリズムを招来することになるというのであろう。しかし筆者には，抽象的な概念詮索よりも，ブルデューが行ったように個別具体的な「差異」の諸相を明らかにしていく方が有益であると思われる。現実をリアルに見れば，多様な「差異」によって生ずる「諸勢力（forces）」間の矛盾や対立を一つ々々克服していく過程として，歴史は推移しているように見える。むしろこの点に希望を託すべきなのではあるまいか。おそらくキニウの「階級」概念は，従来のマルクス主義的な「経済的階級」であり，この特殊な「差異」に全ての問題解決を負わせるが如きニュアンスが読みとれるのである。こうした狭い「階級」概念では，仮に「経済的階級」が「消滅」したとしても，次々に現れる新たな「差異」（階級の下位分類としての階層，諸集団，年齢階層，性差，人種，地域差，産業間，等々）が生み出す対立に不意をつかれ，かえって絶望に陥るほかないであろう。この意味で筆者には，「階級」を「差異の体系」の特殊な形態と捉えた方がよりリアルな社会認識であると思われる。（もちろん筆者とて，社会関係における「経済的階級」の比重の大きさを否定するものではないが，しかしこれに全ての問題を解決する能力を期待するのは，リアルさに欠けると思われる。）

さて第三にマルクスとブルデューの社会的決定論を検討して終わりとしたい。マルクスの社会理論が一種の「社会決定論」，つまり諸個人の意識や行為が社会現象の第一義的な決定要因ではないとする捉え方であることは論を待たないであろう。それは社会関係，とりわけ「生産関係」にあるとするのがマルクス理論であることは明らかであろう。例えば，周知のように，資本家は特定の歴史的社会諸関係（「資本の価値増殖過程」）の担い手として資本家なのであり，決してその個人の内属的特性によって資本家たるのではないとされている[31]。ブルデューも又一種の「社会決定論」に立つものである。すなわち『実践的理性（一九九四年）』の定式化によれば，一定の「資本（物質的，象徴的）」を持ち，それぞれの「場」に一定の「地位」を占める人間の諸「実践（pratiques）」は，「客観的構造」と「身体化された構造」＝「ハビトウス」との「二重の意味（＝方向）」をもつ関係「行為」の所産なのである。しかもこの二つの構造は，ともに「忘却された過去」の所産であり，「時間」の規定を受けた構造なのである[32]。もちろんこの「関係」によって，実践を規定するという方法は，「行為者（agents）を構造の単なる付帯現象（épiphenomène）としてしまう構造主義」[33]とも，またサルトル流の「主観主義の想像的人間学（anthropologie imaginaire de subjectivisme）」[34]とも対立する。さらにこの『実践的理性』では，自分の方法は前述した「分析哲学」の流れをくむ「合理的選択理論」とも対立すると述べている。こうしたブルデューの「社会的決定論」は，一見すると絶望や諦観，欲求不満をもたらすように見えるのだが，実はそこに潜在的な自由の途が開かれている。キニウに言わせれば，ここに決定論の意義があるのだ。つまり，「主体はこの決定法則を知らないが故に『疎外』されているのであり，主体に取り憑いた，また主体を幻想のなかで生きさせるイデオロギー的信念を通して存在を信じているが故に，『主体』たり得ないのである」[35]。社会的（客観的）決定に対する無意識，無自覚が「［社会的］決定の共犯者（complice）」なのである。社会的決

定が意識されないこと，自覚されないことが，社会的決定に「暗黙の了解（complicité）」を与え，それを補強しているのである。ブルデューは「社会的決定論」のポジティブな意義を二つ挙げている。その一つは，決定論は宿命論ではない点である。ブルデューはコレージュ・ド・フランスの教授就任記念講演で次のように述べていた。「社会学的分析，例えば社会的再生産から人を幻滅させるペシミズムや戦意喪失を導き出す者は，落下の法則を発見したガリレオを飛翔の夢を打ち砕いたと言って非難するのと同じことをしているのだ。……。［そうではなく］社会法則はメカニズムの結果を我々の望む方向＝意味（sens）に変えうる—たとえ僅かでも—『変動要因』（A.コント）を準備するのである。従って，［社会的再生産の］メカニズムの認識が，このメカニズムを支配する行為の条件と手段を規定するのである。」[36]自由は，必然性の認識と実践的支配にあるのであって，その呪術的な否定にあるのではない。社会的世界は，決定されているが故に支配できるのだ。キニウは，「社会科学は，ユートピア主義，主意主義（不可能なことを望む非合理主義）とも，諦めや受動的な承認とも闘う」[37]と主張する。これが，まさにブルデューの「合理的ユートピア主義（utopisme rationnel）」なのである。すなわち，「社会学は，僅かとは言え，我々に我々の果たしている役割（＝我々のやっているゲーム）を理解するチャンスを，また我々が生きている場における力の支配と我々のなかで作動している，身体化された支配力（l'emprise）を減らすチャンスを与えるものである」[38]。そしてこの「社会的決定論」の第二の意義は，支配がその効力の多くを社会的決定のメカニズムの無知に負っていることにある。つまり，「とりわけ［支配のメカニズムの］認識が効果を発揮するのは，—私にはこの認識が解放者に見えるのだが—この認識によって露にされた［支配の］メカニズムが，その効力の一部をその誤認に負っている場合なのである。すなわち，その認識が象徴暴力がよって立つ基盤に触れる場合なのである」[39]。以上のブルデューの主張を見れば，彼がマルクス理論と同様に「社会的決定論」の立場に立っていること，またエンゲルスの「必然の認識による自由」[40]の概念を共有していたことは明らかであろう。従って，ブルデューの社会学は「［社会的］決定の認識によってしかできないことなのだが，そうでなければ世界の諸力に身を任せるほかない主体（sujet）なるものの構築に寄与しようとする意志」[41]を表しているのである。前述（注25）の「社会運動三部会」において「権力の流布するシンボルとの闘い」の重要性を強調していたのは，まさに彼の社会学（「象徴権力の社会学」）による支配のメカニズムの経験科学的認識を踏まえてのことであったと思われる。これが，ブルデューが「賢いマルキスト」と呼ばれる所以なのかも知れない。

こう見てくると，ブルデューの社会学は深い倫理性に支えられていることがわかる。前述の「コレージュ・ド・フランス教授就任記念講演（leçon inaugurale）」において，彼は社会学の解放的役割を次のように述べていた。「科学的な社会学を構築するうえで重大な障害となるのは，学者が社会に同化してしまうことである。［そうではなく］社会学者［の任務］は，社会的決定［のメカニズム］を発見し，これを意識化する科学そのものの中に，この社会的決定に対抗する武器を見つけだすことにある」，と[42]。

注

(1) Tony Andréani "Bourdieu au-delà et en deçà de Marx", *Autour de Pierre Bourdieu*

(Paris, P. U. F., 1996) p.47. 原文は以下の通りである。"Bourdieu est souvent qualifié (par ses adversaires) de néo-marxiste. Selon moi (qui suis plutôt l' un sympahisants) il est plus wébérian que marxisant, et c' est du reste ce qui lui permet d' aller au-delà de Marx, d' apporter des enrichements considérables à la socilolgie d' inspiration marxiste." 拙訳：「ブルデューは(その論敵からは)よくネオ・マルキストだと言われる。しかし私(ブルデューの論敵ではなく，むしろブルデューの支持者である）に言わせれば，ブルデューはマルキスト的というよりもむしろウェベリアン的である。しかもブルデューはウェベリアン的であったが故に，マルクスの影響を受けた社会学に多くの豊かなものをもたらすことが出来たのである」。

(2) Jean Baudouin,"Intellectuels, les chemins de la reconversion", *Sciences Humaines*, No. 63, 1996, p.18.

(3) Michel Lallement, *Histoire des idées sociologiques, tome* 2 (Paris, 1993), Nathan, p.53. 原文は以下の通りである。"En France, la percée est moins spectaculaire et le champ sociologique reste structuré par quatre pôles dominants (R. Boudon, P. Bourdieu, M. Crozier, A. Touraine)."

(4) これはブードン教授の下で研究指導を受けていた大学院生から聞いた言葉である。日常的な会話の中で語られた言葉であるだけにかえって，ブードンの率直なブルデュー評を伝えていると思われる。

(5) Loïc Wacquant,"Notes tardives sur le 《marxisme》 de Bourdieu", *Autour de Pierre Bourdieu*, Paris, P. U. F., 1996, p.84.

(6) ピエール・ブルデュー『ピエール・ブルデュー——超領域の人間学—』加藤晴久訳（藤原書店，一九九〇年）十七頁。

(7) Jacqline Russ, *Philosophie, les chemins de la pensée*, (Paris, Armand Colin, 1988), p.533.

(8) 一九九六年一月十七日，コレージュ・ド・フランスのブルデュー研究室での筆者との会見。明るく広い氏の研究室で語られたこの言葉は,「語られること多くして理解されることの少ない」氏の立場を述懐しているように筆者には思われた。

(9) ブルデュー，前掲『ピエール・ブルデュー——超領域の人間学—』，五十頁。ブルデューは『社会学者のメティエ』でも同様のことを述べている。「ある社会学研究が，たとえばマルクスの理論，ウェーバーのあるいはゲュルケームの理論といった特定の社会理論の系列にはいるかどうかと言った問題は，その研究が科学としての社会学に属するかどうかにくらべれば，つねに二次的な問題である。」（田原・水島訳，藤原書店，一九九四年，二八頁)。

(10) 前掲書（『ピエール・ブルデュー』)，四九～五十頁。

(11) Pierre Bourdieu, et al., *Le métier de sociologue, Prealables épistémologiques,* Paris, Mouton Éditeur, 1973.（ブルデュー，他『社会学者のメティエ』田原音和，水島和則訳，藤原書店，一九九四年)。

(12) Bourdieu, *La reproduction,* Paris, Les Éditions de Minuit, 1970, pp.18-19.（ブルデュー『再生産』宮島喬訳，藤原書店，一九九一年，十七頁。）但し，訳文は変えている。

(13) Jean Baudouin,"Intellectuels: les chemins de la reconversion", *Sciences Humaines,* No. 63, Juillet 1996, 16-20p.

(14) この雑誌の創刊以来のタイトルを挙げれば以下の通りである。一号 (1987)：「マルクス主義の状態」，二号（〃）：「日本のマルクス主義」，三号 (1988)：「西欧社会，社会主義の理念」，四号（〃）：「イタリア・マルクス主義とは？」，五号 (1989)：「自由主義，市民社会，国家

と法」，六号（〃）：「ペレストロイカ，それは革命か？」，七号（1990）：「英米の分析的マルクス主義」，八号（〃）：「自由，平等，差異」，九号（1991）：「世界，それは市場か？」，十号（〃）：「倫理と政治」，十一号（1992）：「ウェーバーとマルクス」，十二号（〃）：「エコロジー，その史的唯物論」，十三号（1993）：「行為の理論」，十四号（〃）：「社会主義の新しいモデル」，十五号（1994）：「社会の無意識」，十六号（〃）：「ラテン・アメリカ，南からの視点」，十七号（1995）：「レギュラシオン理論，転換の理論」，十八号（〃）：「今日の帝国主義」，十九号（1996）：「哲学と政治」，二十号（〃）：「ピエール・ブルデューをめぐって」。いずれも「フランス大学出版（P. U. F.）」から刊行されている。

(15)ブルデュー，『ピエール・ブルデュー――超領域の人間学―』，十五頁。

(16) P. Bourdieu, *Choses dites*, Paris, Les Éditions de Minuit, 1987, p.17.（ブルデュー『構造と実践』石崎晴己訳，新評論，一九八八年，十六頁）。

(17) ibid., p.24. 前掲書，二六頁。有名な文言であるが，念のため引用しておこう。「これまでのあらゆる唯物論（フォイエルバッハのをもふくめて）の主要欠陥は対象，現実，感性がただ客体の，または観照の形式のもとでのみとらえられて，感性的人間活動，実践として，主体的にとらえられないことである。」（カール・マルクス「フォイエルバッハに関するテーゼ」，『マルクス・エンゲルス全集』第三巻，大月書店，一九六三年，三頁）。

(18) Bourdieu, op, cit., 1987, p.17.（ブルデュー『構造と実践』，一六頁）。

(19)カール・マルクス『余剰価値学説史』，『マルクス・エンゲルス全集』第二六巻，第一分冊，大月書店，一九七四年，三四六～七頁。

(20) Max Raphael, *Proudhon, Marx, Picasso*, London, Lawrence & Wishart Limited, 1981, p. 77-112.

(21) Bourdieu, et al., *Le métier de sociologue, Prealables épistémologiques,* p.160 et p.193.（ブルデュー，他『社会学者のメティエ』，二二五頁，二七四頁）。

(22) P. Bourdieu et J. C. Passeron, *Le Reproduction,* Paris, Les Éditions de Minuit, 1970, p. 23.（ブルデュー，パスロン『再生産』，藤原書店，一九九一年，二三～四頁）。訳文は必ずしも同じでない。この点以下同様。

(23) ibid., p.26.（前掲書，二七頁）。

(24) ibid., p.28.（前掲書，二九頁）。

(25) ibid., p.26.（前掲書，二六頁）。より一般的に言えば，マス・メディアは言葉とイメージによって，「恣意的」に切り取られた「事実」や「時の流れ」を語ることで，階級間の力関係の再生産に寄与していると言えよう。筆者の滞仏中の一九九六年十一月二三日，パリで開催された「社会運動三部会（Etats généraux du mouvement social）」の設立大会における，知識人を代表した基調報告でブルデューは，「国際化（mondialisation）」や「ネオ・リベラリズム」を主張する権力に抗するには，「マス・メディアの流布するこうした象徴」との闘いが不可欠だと強調していた。同時に今回の体制側の攻撃（いわゆる「ジュペ構想」といわれる「行財政改革案」）は，「一九三三年の保守革命（révolution conservatrice）に匹敵する」ものだとも指摘していた。ちなみに，前年十二月十二日，パリ・リヨン駅で行われたストライキ支援の集会に颯爽と現れたブルデューは，次のように述べたという。「私は，この三週間，一つの『文明（civilisation）』の破壊と闘っている全ての人たちに対して，我々の支持を伝えるために此処にいます。［彼らが破壊をたくらんでいる］この『文明』は，公的サービスや共和主義的な権利の平等，すなわち教育の権利，健康に暮らす権利，文化の権利，研究の権利，芸術の権利，とりわけ労働の権利を含むものです。」（*Liberation,* 14/Dec./1995）。

(26) Pierre Bourdieu, *La distinction, critique sociale du jugement,* Paris, Les Éditions de Minuit, 1979, p.291.（ブルデュー『ディスタンクシオンII』，藤原書店，一九九〇年，六頁）。

(27) Yvon Quiniou,"Des classes à l'idéologie", *Actuel Marx*, No.20, 1996, P. U. F., p.118.

(28)安田尚「P.ブルデューにおける階級論」（細谷昂編著『現代社会学とマルクス』アカデミア出版会，一九九七年）四一六頁。ブルデューの階級論の詳細については，この拙論を参照されたい。

(29) P. Bourdieu, *Raisons pratiques, sur la théorie l'action*, Paris, Les Éditions de Minuit, 1994, p.33.

(30) Quiniou, op. cit., p.120.

(31)カール・マルクス『資本論』一巻(1)（『マルクス・エンゲルス全集』二三巻，大月書店，一九七四年）二百頁。

(32) Bouridieu, *Raisons pratiques,* op. cit., p.9.

(33) ibid., p.10.

(34) P. Bourdieu, *Sens pratique,* Les Éditions de Minuit, 1980, p.71-86.（ブルデュー『実践感覚』1，今村・港道訳，みすず書房，一九八八年，六五～八一頁）。

(35) Quiniou, op, cit., p.132.

(36) P. Bourdieu, *Leçon sur la leçon*, Paris, Les Éditions de Minuit, 1982, p.19-20.

(37) Quiniou, op. cit., p.133.

(38) P. Bourdieu et L. Wacquant, *Réponses, Paris*, Éditions de Seuil, 1992, p.171.

(39) Bourdieu, *Leçon sur la leçon*, op. cit., p.20-21.

(40)フリードリヒ・エンゲルス『反デューリング論』第一編哲学（『マルクス・エンゲルス全集』二〇巻，大月書店，一九六八年）一一八頁。参考までに原文（邦訳）を引用しておく。「ヘーゲルは，自由と必然性の関係をはじめて正しく述べた人である。彼にとっては，自由とは必然性の洞察である。『必然性が盲目なのは，それが理解されないかぎりにおいてのみである』［ヘーゲル『小論理学』下巻，岩波文庫，九六頁］自由は，夢想のうちで自然法則から独立する点にあるのでなく，これらの法則を認識すること，そしてそれによって，これらの法則を特定の目的のために計画的に作用させる可能性を得ることにある。これは，外的自然法の法則にも，また人間そのものの肉体的および精神的存在を規制する法則にも，そのどちらにもあてはまることである。……。したがって，意志の自由とは，事柄についての知識をもって決定をおこなう能力をさすものにほかならない」。

(41) Bourdieu, *Sens pratique,* op. cit., p.41.

(42) Bourdieu, *Leçon sur la leçon,* op. cit., p.9.

La question du marxisme dans le théorie de Pierre Bourdieu.

Takashi YASUDA*

RÉSUMÉ

On appelle souvent Pierre Bourdieu weberien et durkheimien, marxiste. Selon lui, bien que ce soit honorable, c' est un point de vue étroite, arbitraire qui ne permet pas de comprendre sa méthode de construire la sociologie. Je croit que sa sociologie a systématiquement synthétisé différentes filiations scientifiques en remarquant des moments positifs.

Mais, on pourrait trouver là un droit fil du marxisme. Jean Baudouin a situé la sociologie de Bourdieu à un cours du contournement délibéré du référent marxien comme Jürgen Habermas.

Bourdieu lui-même a affirmé qu' il a été enseigné à Marx bien des choses tel que le concept de "pratique", 《Thèse sur Feuerbach》, et telle que "la naturalisation" de l'histoire, la méthode de l' abstraction scientifique. Mais ce n' est pas tout. Je peux faire la preuve de l' ampleur du marxisme sur sa manière de saisir les rapports sociaux comme "une relation de pouvoir" et "rapports des classes".

Et donc, on est en mesure de préciser la relation de l' héritage et du développement entre sa théorie de "la violence symbolique", de l' espace social, son concept de l' habitus et le concept de l' idéologie, la théorie des classes, le déterminisme social de Marx.

* Division of Social Studies